

共同行為としての学習の実現

—学習集団と指導法との関係—

梶川 知

Achievement of the Learning as a Collaborative Action — A Relationship between Learning Group and Teaching Method —

Satoru MASUKAWA

I 学習集団と学習指導法

1 学級集団から学習集団へ

学級という集団は、自然発生的に生まれたものではない。子どもの教育という目的を達成するために組織された目的的集団である。学級の構成員は形式的な条件によって選定され、学級として編成される。子どもたちは、特別な場合を除き、自分の所属する学級の決定に何らかの意志を表明することはできない。また、学級集団には、教育課程の基準となる学習指導要領が用意されている。つまり、そこでは、学習者の興味・関心や発達段階は考慮されるものの、社会的に決定された学習目標や学習内容の達成を目指して、学習者による学習と教師による指導が半ば強制されているのである。授業への参加も学級所属も、子どもたちの自発的な意志や興味は無視されてしまっているように思われる。

本来、学習は学習者のもつ意志によって成立するものである。問題意識であれ、興味であれ、その他の外的動機づけであれ、学習することへの学習者の意志が働かなければ学習の成立は困難であると考えられる。

一方、授業という活動は、様々な要素が複雑に絡み合って成立する。教育内容、教材・教具、指導法、学習者に加え、学習集団（授業のために組織される学習者の集団）も重要な要素の1つである。形式的・偶然的な学級集団を、学習者の意志が反映される学習集団へと転換させていくことが教育現場の課題となろう。それは、「どんな集団でどんな指導を行うのか」の違いによって、授業の性格が大きく決定されてしまうからである。

本稿では、この学習集団と学習指導法との関係に目を向け、将来教職をめざす学生に、共同行為としての学習が実現する教室づくりのために何が必要なのかを考察する。

2 学習集団の成立と改革

学習集団の典型は「学級」である。学級という組織を編成してそこで一斉授業を行うようになったのは、19世紀のことである。イギリスで実施された助教法（モニトリアル・システム）は、優秀な生徒を助教に選び、正教師の補助者として、読・書・算の基礎を一斉授業で効率的に習得させる方法であった。しかし、一斉授業は、個々の子どもの能力の多様性に対応しきれず、画一的な詰め込み教育になりがちであった。

そんな一斉授業を批判し、個人差への対応を掲げて様々な改革案が、欧米、アメリカで考案

された。その多くが学習集団の編成の改革を伴ったものであった。

アメリカの学校改革者であるヘレン・パーカーストによって提唱されたドルトン・プランは、学校を「自由」と「協同」という2つの原則を基調とする共同体に改革し、個別化と社会化を同時に達成することをめざした。また、教科別に個別学習と一斉学習とに分ける形で学習集団の改革を行った。しかし、「個人差や個別の学習を強調しすぎる」「生徒相互の社会的関係が軽視されている」などと批判された。

一方、ドイツの教育学者であるペーター・ペーターゼンによって提唱されたイエナ・プランは、学級を「授業のための組織」と「生活のための組織」という二面性をもつ「生活共同体」と考え、その中での子どもの社会性の育成、個性の伸長をめざした。学級を「低学年集団」、「中学年集団」、「高学年集団」の3つの異年齢集団からなる「基幹集団」に再編し、集団的学習活動や生活のための一種の縦割り組織を導入して、授業の改革と子どもの集団生活の指導の充実とをひとつのものとして捉えようとした。

3 学習集団と授業の形態

日本の学校教育においては、通常、1学級30～40人という集団で授業を行うのが一般的であった。それは、長い間、日本の学校教育における支配的な考え方であった。これは、教育方法の概念としての「集団思考」に教育的な価値を見出してきたからに他ならない。成育歴や生活環境が異なり、物事に対する思考や行動のスタイルの異なる子どもたちが集まり、1つの学級集団を構成し、授業が行われることに意義を見出していたのである。

しかし、今日、子どもの個性の尊重や子どもの学力格差への対応から、集団で学習するスタイルは見直され、さまざまな個別化・個性化の学習形態が採られるようになってきている。通常、学習形態は、＜一斉学習＞、＜小集団学習＞、＜個別学習＞に分類され、次のような指導法の形態が用いられている。

- ① 伝達型……教師が学習者に知識を伝達する方法。主要な教授法は、講義法である。
- ② 相互型……教師と学習者、あるいは学習者相互間での相互作用を基本とする方法。主要な教授法は、発問法、討議法である。
- ③ 自習型……学習者が自ら知識を習得する方法。主要な教授法は、自習法である。

4 学習形態・指導法の形態と長所・短所

(1) 一斉学習

ひとりの教師が、学級集団規模の学習者に、共通の指導内容を共通の指導方法で教える学習形態であり、講義法を用いる伝達型と、発問法や討議法を用いる相互型がある。

長所としては、「少ない時間でたくさんの内容を効率的に教えることができる。多くの学習者に同時に同じ内容を提示できる。特に体系的知識や概略を正確に伝えることができる。(講義法)」、「授業が単調にならず、学習者が授業に集中しやすい。思考を触発し、学習者が授業に対して能動的・積極的になる。学習者からのフィードバックがあり、学習者の状態を把握できる。(発問法)」、「周りの意見や考えを知ることにより自分を振り返ることができる。皆の前で意見を発表したり、他人の意見を聞いたりすることにより、社会性を養うことができる。(討議法)」等が挙げられる。

一方、短所としては、「学習者個々に応じた指導がしにくい。学習者が、受身的・消極的になりやすい。学習者の状態を把握しにくい。授業が単調になりやすく、学習者は注意が散漫に

なりやすい。(講義法)」、「発問を十分吟味しないと、学習者の思考を触発しない。発問に対する応答者が偏りがちになる。(発問法)」、「一部の者の意見で授業が流されてしまう。発言が繋がりがあって、授業の展開をつくるのが難しい。(討議法)」、「知識や観念の教え込みになりがちである。(講義法・討議法)」等が挙げられる。

(2) 小集団 (グループ) 学習

学習集団をいくつかの下位集団 (グループ) に分け、共同学習を行わせるものである。一斉学習にありがちな形式的、受動的な学習を活性化させ、学習姿勢を能動的・積極的にしようとする手段である。指導法は、先に(1)一斉学習において挙げた討議法が主に用いられる。

長所としては、「他人の様々な意見や考え方を知ることにより思考が発展・深化する。学習者全員が討議に参加し、自由に発言し、意見を交換し合い、理解を深めることができる。協力して問題の解決に当たるプロセスを通して、責任・寛容・協調・共同意識といった態度の育成に貢献する。皆の前での意見発表、討議のルールの理解等、社会性の育成に貢献する。(討議法)」等が挙げられる。

一方、短所としては、「民主的な集団でないと、各自の思考が抑制されることがある。討議法が効果を発揮するような適切な課題の設定が難しい。教師の周到な準備と学習者の討議法に対する慣れが必要である。学習者の学びが伴わないと、無駄話や筋違いの討論となり時間を浪費することになる。(討議法)」等が挙げられる。

(3) 個別学習

学習者が自学によって自分のペースで学習を進めていくものである。学習者一人一人の能力や興味に対応し、知識を自発的にしかも主体的に習得させるというねらいがある。指導法としては、自習法である。

長所としては、「個人差・興味に対応できる。きめ細かな指導ができる。(自習法)」、短所としては、「施設、設備、用具等の準備に多くの時間と教師の労力を要する。社会性が育成できない。集団思考がなく、思考を深化・発展させることが難しい。(自習法)」等が挙げられる。

以上のように、どの学習形態にも長所もあれば短所もある。それらが、教育内容、指導法、学習者の実態に合わせて学習形態を変えることによって、新たな長所・短所になっていくのである。

II 学習集団に関する学生の実態把握

1 学生の実態把握・現場教師との比較 (アンケートの実施)

では、この3つの学習形態について、学生はどのように捉えているのであろうか。実際に、児童教育学専攻第4学年・学生40名と現場の先生方3校38名に、無記名の自由記述方式でアンケートを実施した。(実施日 学生7月下旬、教師8月上旬)

学生の実態を現場教師との比較を通して把握し、課題の発見に繋げたいと考えた。

(1) アンケート集計結果 (解答総数上位の項目から掲載した)

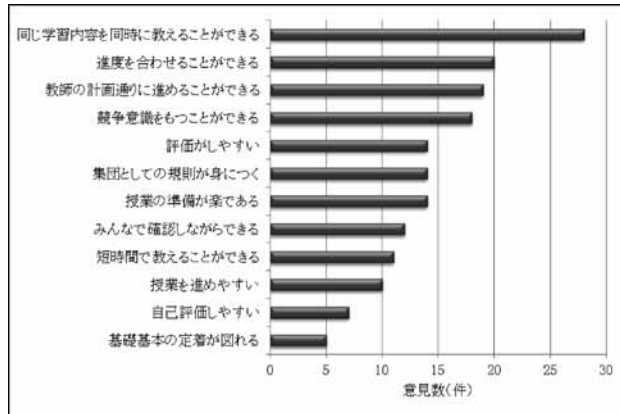


図1 学生が考える一斉学習の長所

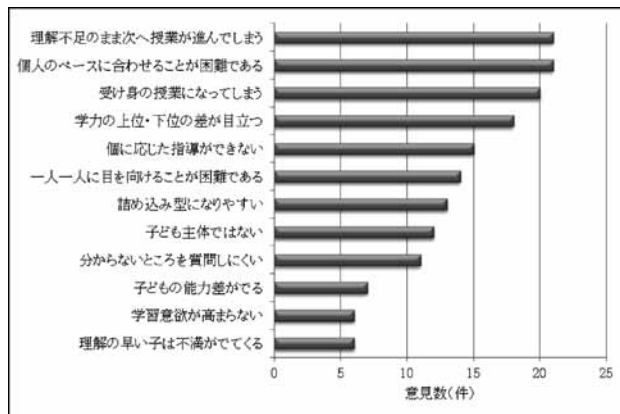


図2 学生が考える一斉学習の短所

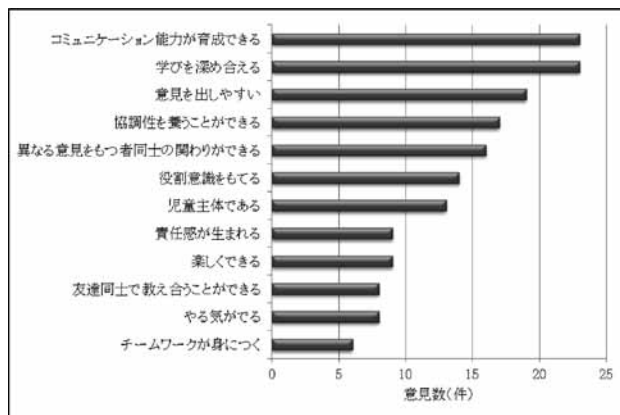


図3 学生が考える小集団学習の長所

共同行為としての学習の実現

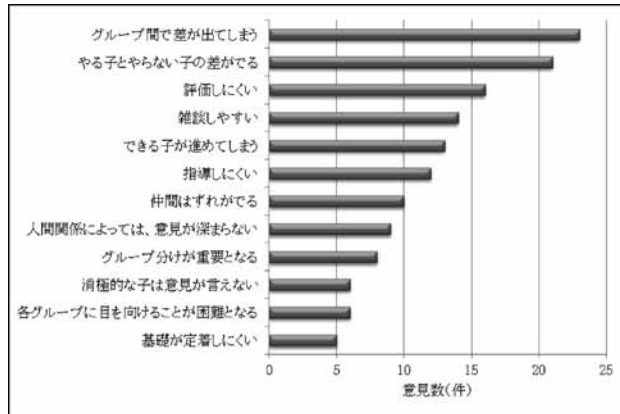


図4 学生が考える小集団学習の短所

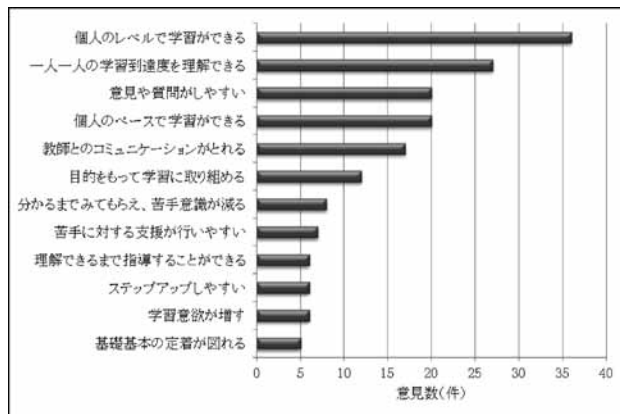


図5 学生が考える個別学習の長所

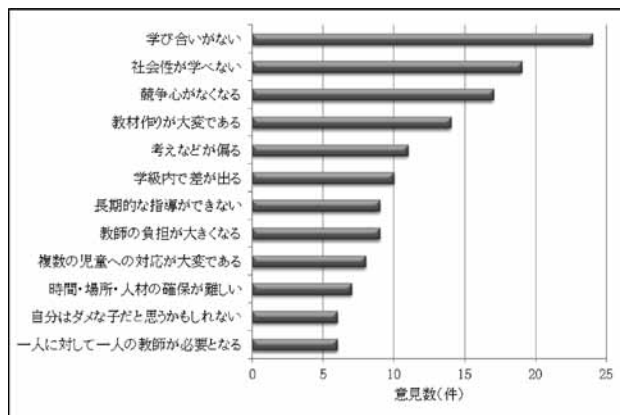


図6 学生が考える個別学習の短所

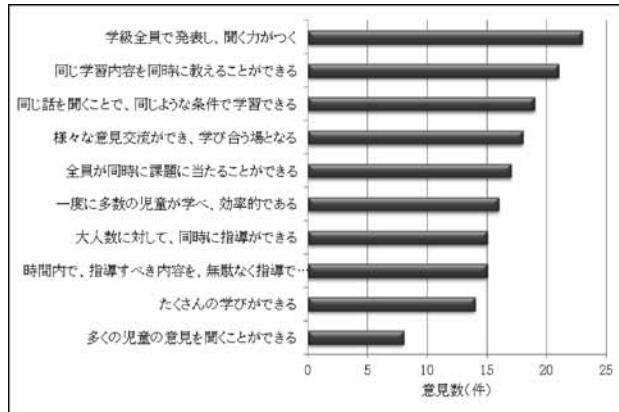


図7 教師が考える一斉学習の長所

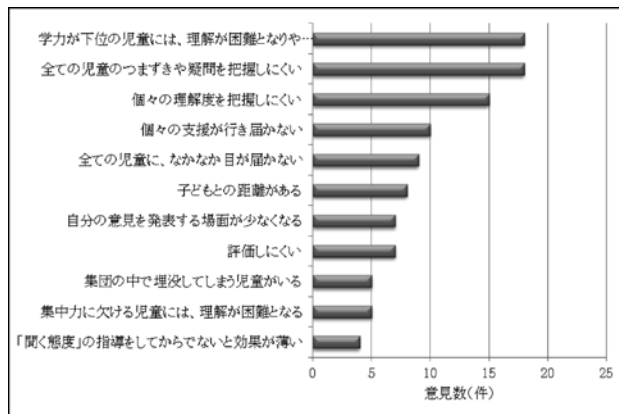


図8 教師が考える一斉学習の短所

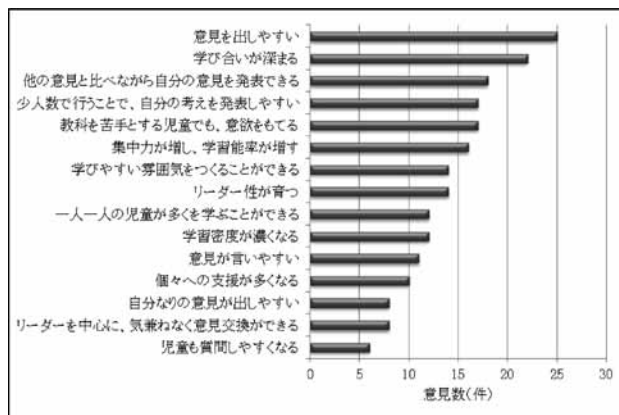


図9 教師が考える小集団学習の長所

共同行為としての学習の実現

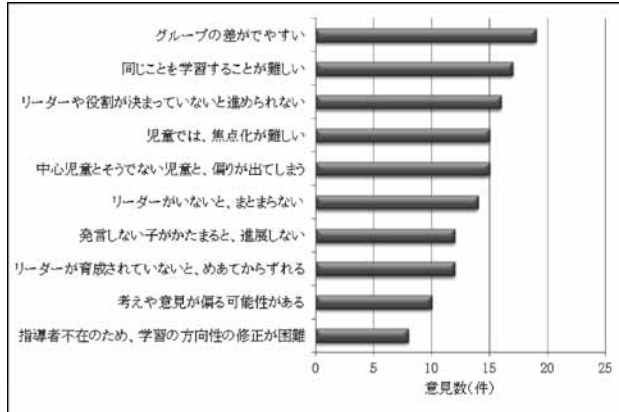


図10 教師が考える小集団学習の短所

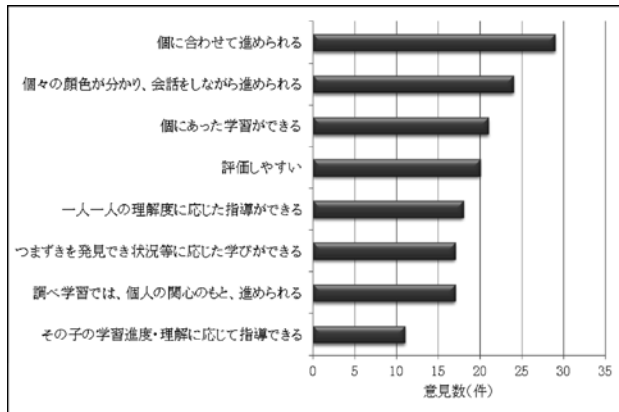


図11 教師が考える個別学習の長所

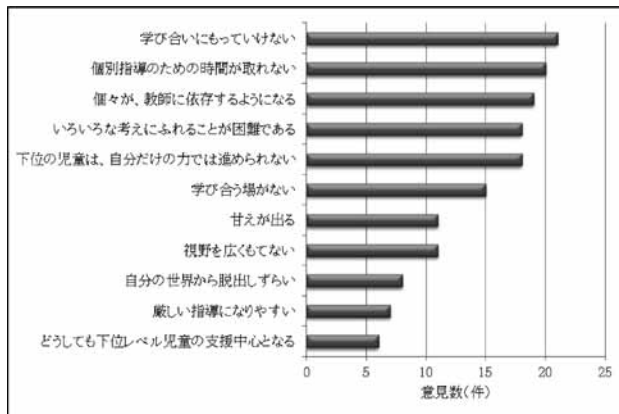


図12 教師が考える個別学習の短所

(2) 考察

一斉学習の長所(図1)についてみると、多くの学生が、「同じ学習内容を同時に教えることができる」「集団としての規則が身につく」「進度を合わせることができる」「教師の計画通りに進めることができる」「授業の準備が楽である」など、一斉学習のもつ長所を確実に理解し回答している。

一方、教師側の回答(図7)をみると、学生の回答とは異なる視点から長所を見出していることがわかる。たとえば、「学級全員で発表し、聞く力の育成」「意見交流による学び合いの場」「多くの児童の意見を聞くことが可能」などである。これらの意見からは、一斉学習を中心とする学習指導の中で、学級担任として子どもたちの実態に合わせ、より効果的な活用をめざした実践の積み重ねと知恵と工夫を見て取ることができる。

学生には、一斉学習のもつ「集団で練り合う」という「集団思考」の良さを再認識させるとともに、現場での実践の中でどのように工夫を重ねていけばよいのか、その手立てを探らせていきたい。

ところで、アンケート結果には、学生に対して意識改善させるべきであると思われる点がある。それは、多くの学生が、一斉学習の長所として「競争意識をもつことができる」と解答している点である。このような解答をした学生の意見を詳細にみると、この「競争意識」というものの中には、良きライバル関係や、同程度の学力の児童同士の切磋琢磨という「共に伸びよう」という意識に裏打ちされた良好な仲間意識もあった。しかしながら、一方で、過度な競争に目が向き、単なる児童間の序列・順位付けのみが優先されてしまった「自分さえ良ければ」という自己優位の意識も多数見受けられた。これは、「他人より優れた」「勝ちたい」という意欲付けに基づいた意識の現れであると考えられる。ところが、競争による意欲付けは、相手に勝つことにあり、勝つてしまえばその意欲は消失しかねない。さらに、競争というものは負ける者の方が圧倒的に多いということが現実である。したがって、自己優位に基づく「競争意識」のみを優先する考え方に立った教育を行った場合、負けた者の立場や意見というものが見過ごされ、勝った者のみが称賛されるという風潮が生じやすくなってしまふ。教育の現場では、互いに競い合っただけでも双方が大きく成長するような協同集団づくりを大切にしておくことが必要であると強く考えている。

今日では、これまでに積み重ねられてきた多くの実証的研究によって、競争に比べて協同による作業や学習の方が効果的であることが示唆されている。すなわち、他者への貢献、他者からの援助という協同の過程で生じる適切な水準の動機付けは、他者に対する勝利を目指す競争による動機付けに比べてはるかに効果的なのである。今学校現場では、ひとつのうねりとして学習形態の如何にかかわらず、競争学習から協同学習への転換を求める声もある。

学生には、集団が個人一人一人を高め、集団としての機能をさらに高めるためのキーワードは、「競争」ではなく、「協同」であることを、学習者である子どもたちの目線で具体的な学習場面を通して理解させたい。

また、一斉学習の短所(図2・図8)に関しては、学生も教師同様に、「一部の学力が下位の児童にとっては理解できないまま授業が進んでしまうこと」「個々への十分な関わりができないこと」「学力の上位・下位の差が目立つこと」「学習意欲が高まらないこと」など、一斉学習のもつ課題が挙げられている。

しかしその中で、教師の何人かが「評価しにくい」と捉えている一斉学習の短所を、多くの学生が「評価しやすい」と長所として回答している(図1)。これは単純に、評価のための基

準を持たないまま全体の中で個々を比較することにより、優劣の評価が簡単にできると考えているからであると思われる。評価方法が、これまでの集団を基準とした相対評価から個人の目標到達度を基準とした絶対評価へと変更されたことの意義に対して学生の理解が不足しているために、教師との意見の差異が生じたと考えられる。

今後学生へは、集団構成によっては努力したことが一律に無視されることにもなる相対評価の矛盾を理解させ、到達目標に対する達成度を評価の目安とする絶対評価の意義、すなわち集団の中での個人の位置を示すのではなく、個人としての努力の成果が達成度として示される良さ、さらには国立教育政策研究所の教育課程開発センターが公表している評価規準とその具体例等を基にした評価方法について学ばせていきたい。

次に小集団（グループ）学習の長所（図3・図9）についてみてみると、学生も教師同様に、「学び合いの深まり」「意見の出しやすさ」「やる気・学習意欲の増大」など、小集団（グループ）学習のもつ良さを挙げている。さらに、長所における学生と教師との違いについて目を向けてみると、共に小集団として人間関係づくりを認めてはいるものの、教師は特に個人より集団に目を向け、その成否を分ける「リーダー」の存在を意識し学習集団としての機能に目を向けているのに対して、学生は個人に目を向け、「コミュニケーション能力の育成」「協調性の育成」「役割意識」「責任感」など、生活集団としての機能に着目していることが分かる。よく、「学校教育は、教科指導と生徒指導の二役を担っている。」と言われる。この言葉を借りれば、教師はより有効な教科指導を小集団（グループ）学習に期待し、学生はより確実な生徒指導を小集団（グループ）学習に期待していると言える。

学生には、小集団（グループ）を構成する全員が同等の立場で討議に参加し、自由に発言し、意見を交換し合い、理解を深め、思考を発展・深化させることができる協同学習の良さとその活用場面についての理解を深めさせていきたい。

一方、小集団（グループ）学習の短所（図4・図10）に目を向けてみると、学生も教師同様に、「消極的な子は意見が言えないこと」「一部の児童による学びの独占・意見の偏り」「グループ間での差」など、小集団（グループ）学習のもつ課題を挙げている。

さらに、教師は長所同様にリーダーの存在を重視していることが分かる。小集団としての学習が成立するか否かを決定し、学習自体の方向付けをなすのがリーダーであると捉えているのである。学生においては、グループ構成員を「やる子とやらない子」「できる子とできない子」「消極的な子」くらいの意識でしか捉えておらず、リーダーの必要性をさほど強くは意識していないことが分かる。

今後学生には、小集団（グループ）学習の意義についての理解を深めさせ、その機能性を高めていくための工夫について考えさせていきたい。

最後に、個別学習の長所（図5・図11）についてみてみると、学生も教師同様に、「個人のレベルでの学習指導」「教師とのコミュニケーション」「分かるまでみてもらえることによる苦手意識の減少」「ステップアップ・学習意欲の増大」など、個別学習のもつ良さを挙げている。

また、個別学習の短所（図6・図12）においても、両者共通して、「学び合いのなさ」「社会性の欠如」「学級内での差」「下位児童への支援中心の学習」「甘えと厳しい指導」など、個別学習のもつ課題を挙げている。さらに、「教師の負担の増大」「指導のための時間確保の難しさ」など、多くの課題も挙げられている。

学生には、個別学習の効果を上げるために、子どもたちのレベルを正確に把握・評価し、その結果を子どもたち自身にフィードバックできる指導上の工夫について考えさせていきたい。

(3) 今後の課題

アンケートの結果より、次の6点が課題と考えられる。

- ① 一斉学習の良さの再確認と、教室での指導の手立ての工夫。
- ② 「競争学習」から「協同学習」への転換と具体的な指導方法の理解。
- ③ 相対評価の矛盾の理解と、絶対評価の意義とその評価規準(評価基準)の作成。
- ④ 全員が討議に参加し、思考を発展・深化させる協同学習の良さについての理解。
- ⑤ 小集団(グループ)学習の意義の理解と、その機能性を高めていくための工夫。
- ⑥ 個別学習児童のレベルを正確に把握し、フィードバックできる指導上の工夫。

Ⅲ 学習集団の柔軟化

1 課題解決のために

これら6点の課題を克服し、解決させていくためには、まず、<一斉学習>、<小集団学習>、<個別学習>のそれぞれの良さを確実に理解させることが必要であろう。その上で、その良さを相互に関連付けながらさらに効果的に機能させていくためには何が必要なのかを追究させていくことが急務であろうと考える。

そのための1つの手立てとして、実際にこれら3つの学習形態の良さを活用した学習計画を立ててみる可以考虑。

(1) 学習集団の変革

どのような学習形態(上記した一斉学習、小集団学習、および個別学習)にし、どのような学習集団を形成したにし、万能のものは1つとしてない。学習目標や学習内容に合わせて、学習形態・学習集団や学習指導法を柔軟に選択し決定していくことが求められている。

学習集団をより柔軟にする方策としては、次の2つが考えられる。

- ① 一斉学習を前提に、他の学習形態の長所を取り込むという方法である。

一斉学習の長所である短時間での効率的な共通の学びや同時的な学習内容の提示・伝達、さらには、周りの意見や考えを知ることにより自分を振り返り高めることができる集団思考の良さ、皆の前で意見を発表したり、他人の意見を聞いたりすることにより、仲間意識を養うことができる集団としての良さ等を最大限に活用していくのである。そして、この良さに小集団(グループ)学習のもつ協同性・社会性と個別学習における個性化の良さを加えて、個々の児童に配慮する工夫の余地を残していくのである。

- ② 各学習形態を組み合わせ、それぞれの良さを活かしながら、個々の子どもたちへの配慮を重視していく方法である。

小集団(グループ)学習における協同性・社会性と個別学習における個性化、そして、一斉学習における効率化等それぞれの良さを活かし、学習を常に一人一人へ返そうとする学習方法である。

(2) 学習集団と学習指導法との関係に目を向けて(国語科における具体的実践例)

今回の学習指導要領の改定で、国語科においては、各領域で言語活動例を行うことを通して、指導事項の知識や技能を身に付けさせることをめざしている。そのために、言語活動例に即して指導事項をアレンジして指導目標や指導内容を具体化させる仕組みをとっている。つまり、「C読むこと」の言語活動例を、「A話すこと・聞くこと」や「B書くこと」の言語

活動例と関連付けて学習させることにより、より効果的な学習が期待できるように配慮されているのである。言い換えれば、それぞれの言語形態（「話す」・「聞く」・「書く」・「読む」）が果たす役割に応じた力をはぐくむことを重視しているのである。そのため、今回の学習指導要領では言語活動例として求められる言葉の様式が多様となっている。

「話すこと・聞くこと」では、＜説明や報告、感想・意見発表、話し合いや討論、紹介や推薦＞といった言語活動例に対して、「座談会・パネルディスカッション・プレゼンテーション」等が提示されている。

一方、「書くこと」では、＜詩・物語の創作、報告文、説明文、紹介文、依頼状、案内状、学級新聞＞といった言語活動例に対して、「短歌・俳句・随筆・新聞・リーフレット・パンフレット」等が提示されている。

そして、「読むこと」の学習では、＜物語や詩、伝記の感想、説明書、解説書、事典の利用と感想、本の紹介や推薦＞といった言語活動例に対して、読む対象として、「新聞・雑誌・地域の情報誌・テレビ・ラジオ・ホームページ」等多様な様式が提示されているのである。

このような多様な言葉の様式を持つ言語活動例に対して、単純に学習集団・学習形態を選択・決定していくことには問題があるかも知れないが、このことを通して、3つの学習集団・学習形態の可能性を探っていきたいと考える。

まず、「話すこと・聞くこと」に関しては、座談会・パネルディスカッション・プレゼンテーションともに、集団としての規模は学習者の人数・実態等に合わせて考えるものの、一斉学習がその中心となることに変わりはない。役割分担を前提とした学習活動において、発問法・討議法による話す・聞くの集団思考を活用した個々の自己確認を通して、個人の学びの深化が期待できる。また、準備段階においては、小集団学習における討議法による検討会・点検活動・リハーサルも有効であろうと考える。さらに、個々に発言内容を確認・準備させる段階においては、個別学習における自習法が有効に機能するであろう。

次に、「書くこと」に関しては、短歌・俳句・随筆・新聞・リーフレット・パンフレットともに、単元の導入段階では、一斉学習による講義法を中心とした全体説明が有効であろうと考える。その際、学習への興味付けを図ったり個々の理解をより確かなものとしたりするために発問法により理解不足への補足も大切にしたい。続く作業学習段階においては、短歌・俳句・随筆は個別学習における自習法が中心となり、新聞・リーフレット・パンフレットは小集団学習による討議法がその中心となるであろう。さらに、続く鑑賞・発表段階においては、グループでの感想交流後に再度一斉学習による相互型の発問法・討議法活用による感想交流学習と評価活動、そしてまとめとしての全体指導がその中心となるであろう。

一方、「読むこと」に関しては、対象としての新聞・雑誌・地域の情報誌・テレビ・ラジオ・ホームページ等の多種多様さを逆に利用する方向での＜比較・検討の学習＞が可能となってくると考えられる。その際には、担当した個人での読みを大切に提案をベースに、小集団学習による討議法を活用してのテーマごとの意見交流とまとめ（批判的な読み）、そして、一斉学習による伝達型の講義法と相互型の討議法による全体発表へと学習を発展的に展開させ、それぞれの記事の扱い方の違いや表現の違いなどから筆者の考えに目を向けさせることができる。なお、学習集団はステップごとに、個別学習（個人）・小集団学習（グループ）・一斉学習（全体）がその中心となってくるのである。

学生には、「学習は、常に個人としての学びがその原点にあり、その個人としての学びをさらに発展させ高めさせていくのが、グループでの学習であり、一斉学習である。」ことを

具体的に確認させていきたい。

2 まとめ・学習集団の柔軟化

今日の学校教育では、学級集団を学習集団と同一視してきたこれまでの学級に対する固定的な考え方から離れて、多様で機能的な学級観が出現してきている。ひとつの指導法・ひとつの学習集団に固執することなく、目標に対する子どもたちの実態等を的確に捉え、柔軟に考えるという「学習集団の柔軟化」である。

あくまでも、学習集団の柔軟化は、その学習集団において学習者の主体的で個性的な学習を成立させるために行われるべきものであると考える。その学習集団を柔軟にしていく重要なポイントは、授業の目標、教材・教具、学習者等に応じて臨機応変に適切な指導法と学習集団を選択・設定することであるといえよう。そのためには、個々の学習形態に関してその長所及び短所を十分に認識し、さらに指導上留意すべき点を確実に理解しておかなければならないのである。学習内容、教材の種類、子どもたちの状況、それに教師自身の力量などを考慮して、場面ごとにより教育効果の高い学習集団を選択・設定することが重要であると考えられる。つまり、真の意味での「学習集団の柔軟化」を行うには、教師の高度な専門的な力量を必要とするといえるのではないであろうか。

今後、「教育の方法と技術」等の時間を中心として、将来教育現場を目指す学生に、実際に教育を進めるための指導技術に目を向けさせると同時に、その教育の方法や技術の根底に働いている原理を支える教育理論にも目を向けさせ理解させることにより、実践的指導力の基礎をしっかりと身に付けさせていきたい。

参考文献

- 杉江修治「競争学習から共同学習へ 原理からの学習指導の見直し」
『学校カウンセリング研究、5』日本カウンセリング学会（2002）
新しい国語教育を創造する会『小学校 新学習指導要領の展開（国語科編）』明治図書（2008）
柴田義松・山崎準二『教育の方法と技術』学文社（2010）